フィリピン系アメリカ人とその文学―ポストコロニアル観点からの考察

河 原 﨑　　や す 子

Filipino Americans and their Literature: A study in terms of Postcolonial Perspective

Yasuko Kawarasaki

Abstract

This paper tries to trace the colonial history of the Philippines and analyze how it has affected Filipino American literary representation. The history of colonization has brought about the Filipino immigration to the US, but white America's discrimination made Filipinos hold the Philippines as their true homeland. Accordingly, their writings became inseparable from there. Current Filipino American writers tend to write Filipino postcolonial problems as the subject matter. While Filipino critics strictly accuse this trend, Asian American critics insist a transnational perspective is inevitable for immigrants' literature. The controversy raises the serious question of how immigrants can represent their homeland.

Key words

Postcolonial, Filipino American, Filipino American Literature, controversy

はじめに

アジア系アメリカ人という語はすでに定着しているように思われるが、今からわずか50年ほど前1960年代にアメリカを揺るがしたエスニック運動の過程で生まれた、じつは新しい呼び名なのである。それまで中国系とか日系といった呼び名で表されていたアジアからの移民マイノリティは、アジア系全体として集合すれば大きなパワーを持てると気づき立ち上がった結果、アジア系アメリカ人という語が認知されるにいたった。この呼称は、「アジアから来た」移民として共通点を持つ人々を指すが、その出身国はアジアのさまざまな国であり、歴史、社会、文化、習慣などで大いに異なる。だがこの大きな相違を乗り越えて団結することで、アメリカ白人から非白人のアジア系に対して向けられた激しい差別と偏見に対する抵抗と排斥の道筋をようやく見出したのである。その結果彼らはアジア系として認知を得、コミュニティを確立すると共に、大学等における研究拠点を設立して民族の誇りを取り戻し、今日に至ったのである。

アジア系アメリカ人はおよそ150年の移民の歴史を持つが、60年代までは中国系、日系、フィリピン系の３大エスニックがその順に人口の大部分を占めてきた。しかし65年の移民法改正で大量のアジア移民が流入してアメリカの移民構成上に極めて大きな変化が起き、2000年の国勢調査では中国系に続いてフィリピン系が２位に浮上しその急増ぶりを証明した。アジアからの移民の波は現在「最も急増するマイノリティ（fastest growing minority）」と認識され、アメリカの将来の人

種分布を大きく変えるものと予測されている。

このフィリピン系アメリカ人は上記のアジア系アメリカ人の中で、ある意味で例外的な存在といえる。彼らは経済や政治の不安定のために移民する点では、大多数のアジア系移民と同じだと言えるが、その一方でアメリカの植民地であった歴史を抱えること、専門職の移民が現在主力となっていることなど特有の事情も持つ。ことにスペインの長期の植民とそれに続くアメリカによる植民化および日本軍占領という植民地体験が、フィリピン人ばかりかアメリカへのフィリピン人移民のアイデンティティを大きく左右していることは間違いない。フィリピン系アメリカ人が、中国系や日系などのような緊密なコミュニティを歴史的に形成できなかった理由はここにあると考えられる。現在のフィリピンからの移民は、このような植民地体験を経たポストコロニアル状況の中にある。本論文はこの点に注目し、フィリピン系アメリカ人にとってコロニアル体験が今日どのような問題をもたらしているのか、それが文学面にどう表明されているかを論考する。

Ⅰ．フィリピン人のコロニアル体験とアメリカ移民―歴史をたどる

フィリピンといえば、出稼ぎや移民の大国とか娼婦や娼夫やトランスジェンダーのいる国のイメージがまず思い浮かぶ。インドや中国などのように工業でめざましい成果を挙げているわけでもなく、シンガポールやマレーシアのような経済繁栄もおぼつかない。貧困と階層不平等の蔓延しているイメージは現実を反映したものだ。アメリカへの大量移民および全世界への出稼ぎもそこから生じており、この現実をたどってみれば、過去のコロニアル状況と密接にかかわっていることが容易に明らかになる。そこでまずフィリピン移民を考える際には、その歴史を植民との関わりから振り返ることが必要となる。フィリピンが、欧米による長い植民によって決定的に変容したことは明らかである。そもそもフィリピンという国家自体が植民から始まったようなものであり、現代に至るまでごくわずかの期間を除いては、国家共同体としてのフィリピンは絶えず植民地状況にあったといえる。まさに「フィリピンの歴史は征服、占領、搾取の歴史」（Espiritu, 2003）であり、フィリピン人の民族アイデンティティは根源から剥奪された（E. San Juan, Jr., 1998）というわけだ。以下にコロニアリズムがフィリピンをどのように翻弄したか、アメリカへの移民を中心としてフィリピン史を概観する。

スペインの植民統治期（1565年～1898年）

スペインの植民以前にはフィリピンは国家として成立していなかった。マゼランが1521年にセブ島に到達し植民化に失敗して以来、スペインはその地域の植民化を狙っていたが、1565年に成功する。これがフィリピンという国の成立であり、それ以前には7100の島々は多言語のもとに別々の共同体を成していた。スペインはカトリック教会を軸とした植民地支配を行ってフィリピン全土のキリスト教化をめざし、結果として今日、アジアではまれなキリスト教国となっている。この330年あまりの植民統治はフィリピン人を搾取し自由を奪うものであり、最終的にフィリピン人はホセ・リサールを思想的指導者と仰ぎ独立を求めて運動を起こすが、リサール自身は処刑される。その後帝国主義的拡張を目指したアメリカが独立の志士アギナルドを支援、1898年にフィリピンは革命を成功させて独立を宣言した。これは東南アジアで初めての植民地の独立革命として画期的なことであったが、ごく短期しか継続しなかった。この時期のアメリカへの移民に関しては、18世紀後半のスペインのガレオン船でメキシコ、ルイジアナ間を航行したマニラメンがいる。マニラメンはニューオーリンズ付近に定住し、移民のさきがけと位置づけられよう。

アメリカの植民統治期と日本の軍事占領期（1899年～1945年）

米西戦争の結果、1898年にスペインからフィリピンの支配権を委譲されたアメリカは、独立を無視していわゆる「恩恵的同化」として植民地支配を行うことにする。これに反発したフィリピン独立軍は1899年から1902年にかけてアメリカと戦うが敗北し、その結果アメリカによる植民地支配が始まる。フィリピン植民の姿勢は、併合間もない1904年にセントルイスで開催された万国博覧会の展示に象徴的に示されている。Philippine Reservation という47エーカーの敷地に1200人のフィリピン人そのものが展示され、「サルのようなネグリト族」、「野蛮なイゴロト族」、「いささか知的なビサヤ族」などと項目分類され、衆目にさらされたのである。以降のアメリカのフィリピン支配は、このような圧倒的な抑圧と搾取を継承したものだといえよう。英語の強制やアメリカ社会や教育制度移入などによって、アメリカ文化は隅々まで広められたのである。

植民支配によってアメリカ市民扱いとなったフィリピン人は、安価で安易な労働力としての移民を始めた。（第一波移民期1906～1930年代）。ハワイへの初めての移民は1906年に始まり、続けて本土への移民が1920年代に本格化し、アメリカ本土にわたったフィリピン人は30年代までで４万人あまりとされる。移民は未婚男性のみでマノング manong と呼ばれた農村労働者が大部分だったが、都市への移住者にはハウスボーイ、ポーター、掃除夫などの労働をしながら学生だった者が多い。19世紀末から20世紀初頭にかけての中国や日本のアジア系移民に対する差別的な規制法によりアジアからの移民労働者が減少し、1924年の移民法でアジア移民は全面的に禁止されたため、例外的なフィリピンからの労働者がアジアからの安価な労働力として歓迎された。しかし彼らは準（二級）アメリカ人という扱いしかされず、差別的な扱いにたえず苦しんでいた。さらに、女性移民がいない中でフィリピン男性は白人など異人種間の交際に積極的であったため反感を買った。彼らに対する経済的な脅威感も加わって移民排斥の動きが強まり、1934年にアメリカはフィリピンの独立を約束するタイディングス＝マクダフィ法を成立させることで、フィリピンからの移民を事実上打ち切った。

第二次世界大戦はフィリピン本国とアメリカの関係に大きな変化をもたらした。フィリピンの米軍基地は1941年、日本軍によって占領され、以後1945年までフィリピンは日本に軍事占領される。これに対抗したのがフィリピン系アメリカ人を編入したアメリカ軍で、フィリピン系兵士はアメリカ国籍を獲得して正規兵としてアメリカ兵と共闘し、最終的に日本軍を破った。ここにおいて比米両者が初めて手を取り合って、帝国日本の軍事力と対決したわけである。このフィリピンの植民最終ステージで登場するのがダグラス・マッカーサーで、軍事顧問としてマニラから指示を与え、一旦は豪州に退却したものの最終的に日本へ勝利を収めるのに貢献し、フィリピン国民に熱狂的に歓迎された。この時点でアメリカは救世主となったのである。

戦後フィリピン―独立とアメリカ依存体質

フィリピンは1946年独立国となる。この時期はアメリカ移民に関しての第二波移民期（1940年代～1960年代前半）と位置づけられ、独立したとはいえ依然援助や軍事基地存続などでアメリカとの強い結びつきが継続した。新たな移民者は少数で、1940年の国勢調査ではフィリピン系アメリカ人の人口は約４万５千人で、1950年までに６万あまりに増加している。この間、多くの女性が兵士の妻として特別移民枠を与えられて流入し、長年男性主体だったフィリピン移民のジェンダー構成に変化をもたらした。そのほかは、労働移民が相変わらず多かった。

1965年の移民法改正はアメリカへの移民を劇的に増加させた。新移民法と呼ばれるこの法改正

でアジアからの移民へのそれまでの規制を撤廃し、世界各地域からの移民を地区別人数割り当て制とし、東地区から17万人枠、うち１国２万人までとした。フィリピン系にとっては第三波移民期（1965年～1970年）である。この結果、1970年に34万人、80年に77万５千人、90年に145万人、00年には180万人とフィリピン系の人口は急増した。いわゆる新移民と呼ばれるこの期のフィリピン移民の特徴は、看護師、医師を中心とした高学歴の専門職で永住を目的としていることである。

植民時代が終結してなお、この大量移民を生じる背景には、植民地時代が大きく影を落としているフィリピンの政治、経済、社会文化状況がある。65年に始まるマルコス政権の独裁は記憶に新しいが、富と権力が偏在している状況はいまもなお変わっていない。だがフィリピンにおけるアメリカ依存が変革期に来ているのは確実であり、それを象徴的に示すのは1992年の米軍基地完全撤収である。さらに1996年から1998年にはフィリピン革命100年記念が盛大に祝われ、以来フィリピンはアメリカからの自立を目指す方向にある。

Ⅱ．ポストコロニアル・フィリピンとアメリカのフィリピン系文学

フィリピン人は、現在故国に安住できないさまざまな理由によりアメリカに大量に移民しているが、希望を持って移民したアメリカでも多くの問題に直面している。ここで、フィリピンの問題はアメリカとの関連でどのように捉えられるか、そして文学にどう表現されているかを考えたい。

Ａ．現代フィリピンの問題点

先に述べたように、フィリピンが現在抱えるのはポストコロニアル問題とみなされる。長年の植民時代の結果は政治の腐敗を招き、政治経済の現状はあらゆる意味で問題含みである。現在6900万人のフィリピン国民のうち72%が極貧にあるという貧困状況で、首都マニラの在住者は38%が貧困ライン以下にあり、40%が標準以下の住居に住む。全体で40%の労働者が雇用されないという労働状況に加えて、国の食糧生産はトップクラスでありながら輸出依存のため、国民は世界で２番目に栄養が悪い状態にある。1950年に5200万ヘクタールあった熱帯雨林が農業用地開拓のために伐採され現在は100万ヘクタールに減少し、その結果毎年起こる洪水の被害が貧困層を追い詰めるといった環境問題も抱える。

言語や教育の問題も深刻である。植民地政策で英語が公用語となったこと、アメリカの教育システムを取り入れたことによって、そもそも多言語であったフィリピンは混乱に陥っている。現在の公用語はフィリピン語と英語であるが、フィリピン語よりもタガログと英語の混合であるタグリッシュを公用語にすべきだと言う見解もあり、いまなお統一には困難が伴っている。ただし植民地政策のもたらした英語教育によって、アメリカへの移民、ことに専門職の移民が容易となっているという指摘もあるが、これはフィリピンに専門職の受け皿となる職場が極端に少ないためでもあり、事態を単純に解釈することはできない。文化的には英語で書かれたものが主であるが、たとえば建国の父といわれるホセ・リサールの著作がスペイン語で書かれており、今では翻訳でしか読めないというのは象徴的である。フィリピン作家のゴンザレス N.V.M. Gonzalez は、フィリピン人であることの意味をよりよく知るためには歴史をしるす必要があるが、それは借り物の言語である英語では出来ない（Gonzalez, 1998）と、フィリピン人のアイデンティティ確立がいかに困難かを指摘している。

フィリピンのポストコロニアルな女性問題として挙げられるのは基地関連で、ジェンダー、階

級、国家、人種などが交錯する問題である。1970年代、80年代にアメリカはマルコス独裁政権を支援した見返りとしてクラーク空軍基地とスービック海軍基地を拡大使用し、ことにヴェトナム戦争の基地として重要な拠点とみなした。大勢の駐留米兵にはフィリピン人売春婦が集まり、さまざまな国境を越えた問題が起きた。結婚に絡まる女性問題や混血児問題、移民問題などである。これらは92年に基地が撤退したことで解消したということはなく、いまなおフィリピンとアメリカに残る大きな課題である。さらに現在、フィリピンの外貨獲得の最大勢力となっている海外出稼ぎ女性の問題もアメリカばかりか世界的規模で起きている。いずれも問題とすべきなのは、手に入れやすいとか奉仕者保育者というフィリピン女性イメージであり、これがフィリピン系女性のステレオタイプを作り上げている。メールオーダー・ブライドなどはまさにここに立脚した現代の移民問題であり、論議の的となっている。

Ｂ．アメリカにおけるフィリピン移民の問題点

以上のようにさまざまな困難を抱えたフィリピン人が、大量にアメリカに永住志向で移民している。その特徴として挙げられるのは、故国との社会的経済的精神的結びつきが非常に強いことである。いわば太平洋を隔てたトランスナショナルな家族を形成しようとするかのようである（Espiritu, 2003）。通例、移民は移民国に同化していくものであるが、なぜだろうか。これは、かつてフィリピン系移民が植民地フィリピン出身ということでアメリカ人の身分を与えられながら、実際には二級国民として差別され不可視の存在に貶められ沈黙を余儀なくされた結果、それを補うかのように故国フィリピンへきわめて強い愛着が生じた歴史によると Espiritu は分析し、今なお故国 home という概念はフィリピン移民にとって現実に帰る場であると同時に、いわば想像上の概念となって機能しているとする。

彼らをそこまで追いやったアメリカにおける差別とはどのようなものなのか。アメリカのフィリピン人への差別は、フィリピン植民にさかのぼる。フィリピンの植民化はフィリピン人をアメリカ国民と位置づけたが、その一方でセントルイス万博での展示に見られるようにフィリピン人を見世物とすることで他者化して抑圧した。この他者化は、アフリカ系やメキシコ系に対して白人アメリカがとった形態と同様の方式である。またフィリピン人は市民権 citizenship をもたないアメリカ国民 national となったことで、アフリカ系やネイティブ系と同様な安価な国内労働力という位置が定められた。つまり内的植民化である。

こうしてフィリピン人は投票権や土地所有権などの法的権利をもたない国民、すなわち二級国民と位置づけられた上で、さまざまな手段で劣等なイメージを広められた。このネガティブなステレオタイプの形成は、ジェンダーと密接に絡んだものである。フィリピン民族全体を都合よく他者化して支配するために、フィリピン男性は一方で非文明的、野蛮で強姦魔とされ、他方で男らしさに欠けて自治能力がないとか女性的で弱々しいという、相反するステレオタイプをあてがわれた。あるいは植民の正当化のために、男女いずれに対しても「超」女性的ステレオタイプをあてがい、それに対してアメリカ男性は男らしさに満ち溢れ、女性的なフィリピンを統治するのにふさわしい存在だというジェンダー言説が作られた。こうしてみると、植民化そのものはジェンダー、人種、国家の交点に成り立ったものなのである。セントルイス万博では、フィリピン人の展示を通じて「木の上の住人」Tree Dwellers とか「犬を食べる人々」Dog eaters という恣意的なフィリピン人表象が広がり、今に至るまで差別用語として流通している。Little Brown Brother という表現も決して「兄弟」と親しみをこめて呼ぶのではなく、意のままになる有色人種という差別

的含みがあるものだ。さらにセクシュアリティに関して、フィリピン男性がレイピストだといった性的イメージは、女性不足だった移民初期のフィリピン男性移民がアメリカの白人女性と結びつくことに対して、白人労働者階級男性が脅威を抱いた結果生じたものであり、その後の異人種間結婚禁止法の制定は明らかにこれと結びついている。このような否定的ステレオタイプは今なおフィリピン移民につきまとい、容易には解消しないのである。

C．フィリピン系アメリカ人と文学

フィリピン系アメリカ人はこれらの問題をさまざまな形で論議し、研究し、解決を目指して運動を進めてきた。その一方で社会学、人類学、歴史学などの学問分野を横断した形のアジア系アメリカ研究が大きくそれに貢献してきた。文学もまた、大きな意味で運動を起こす力として機能してきた。アジア系アメリカ運動の担い手には、文学者が多かったことはそれを立証している。フィリピン系アメリカ人は、上記した問題を背景とした文学を生み出しており、そのアプローチは多様である。ここで主要な作家の問題意識に注目してたどってみたい。

カルロス・ブロサン Carlos Bulosan は最も初期のフィリピン系作家だが、彼はアメリカ社会で拒絶され抑圧された自己体験を代表作 *America Is in the Heart* にリアリズム手法で描き、フィリピン移民の出自の違いによる齟齬についても言及した。1930年代に自ら体験したアメリカ社会の熾烈な人種差別と、それゆえに自暴自棄になるフィリピン人の移民仲間とのはざまで、アメリカの夢を何とか手に入れようとして闘う自画像は、底流に差別する側のアメリカへの強烈な憧れを保持していることで、同化主義的とも批判される。しかしその一方で、劇的ではないとはいえ自らの場を求めて差別と闘う姿勢自体はその後のフィリピン系作家に続くテーマとなっており、フィリピン系文学のひとつのあり方として一定の評価をされている。サントス Bienbenido Santos も同様な系譜に位置づけられる作家だが、人種差別に対する反感は薄められ、より個人的な故国へのノスタルジアやアメリカでの疎外感といったテーマに関心が移っている。

彼らアメリカ移住者に対して、フィリピンを生活基盤としつつアメリカと往来した Jose Garcia Villa や N. V. M. Gonzalez がフィリピン系作家に加えられなかったことに関して、現在多くの批判がされている。同世代で同じ国に生まれ、コロニアリズム批判を念頭にした同様のテーマを英語で書いた彼らは、アジア系アメリカ文学の始めてのアンソロジー *Aiiieeeee !* や Elaine Kim の記念碑的解説書 *Asian American Literature* でも取り上げられなかった。これをアメリカにいるアジア系の植民地主義的な態度だと批判する論もあるが、それに関してはいずれ触れることとして、ここでは90年代にやっと重視されるようになったゴンザレスに注目したい。マルコス独裁政権を逃れて渡米したゴンザレスは、アメリカ帝国主義がフィリピン系文学に関しては逆方向に作用しているとし、フィリピン系作家の故国フィリピン志向というテーマを文学に見出すとともに、自身それを文学に表した。これは移民国へ同化を願う従来の移民の逆を示し、アメリカに身をおきつつホームランドへの眼差しを強く保持するフィリピン系のあり方を示したものにほかならない。

アメリカとフィリピンの関係性において、以上のような同化か非同化かといったテーマから、ディアスポラ、グローバル化、トランスナショナリズムといったテーマへのいわばパラダイムシフトが、65年以降の新移民の時代に起きたと考えられる。ここで最も大きなテーマとなるのは、上記したコロニアル・フィリピンの問題である。ニノチカ・ロスカ Ninotchka Rosca、ジェシカ・ヘゲドン Jessica Hagedorn、リンダ・タイキャスパー Linda Ty−Casper、セシリア・ブレナード Cecilia Brainard などの女性作家が80年代前後から次々に登場し、新たな潮流として注目を浴びている。い

ずれもフィリピンの現状に問題を見出し、それがコロニアル時代の置き土産であることをさまざまな手法で糾弾する。全員フィリピン生まれだが、ロスカはマルコス政権下で投獄されて渡米、ヘゲドンは10代で家族と共に移民、ブレナードとタイキャスパーはいずれも大学院入学を期に渡米し結婚後アメリカに定住という経歴で、新移民特有の共通点を持つ。どの作家も、なぜフィリピンがこのような状態であるのかを作品を通じて問いかけ、悲惨な現状の提示や植民の歴史をたどり、フィリピンがかつて持っていた文化や言語を掘り起こし本来の民族の誇りを取り戻すことが可能かどうかを問う。この作家たちは、明らかにアメリカに身を置くことによってフィリピンの混乱を直視し、その根源を問うことを自らの使命と位置づけている。彼らは、アメリカが植民という行為をいまだ省みるどころか、正当化し、さらにネオコロニアリズムを展開していることに文学表現を通じて抗議することこそ、アメリカに身を置きながらフィリピンを書くことの意義だと捉えている。

このようにフィリピン系アメリカ人の文学を概観すると、彼らが故国フィリピンと移民国アメリカのはざまにあって、決してフィリピン問題を離れて文学活動を展開することはないと分かる。実際、これらの作家はほとんどがフィリピンと行き来しつつ創作をしている。フィリピンに生まれ育ちその中で問題意識をはぐくまれた人間が、アメリカの中の差別に出会ったとき、フィリピンに立ち戻って問題を追及する。あるいはフィリピンの問題をアメリカで訴えかけることで、アメリカ人にフィリピン問題の認知を迫る。こういった意図で書かれたいわば政治色の強い文学を読むには、逆にフィリピン問題への知識と理解は不可欠だと言える。フィリピンとフィリピン系アメリカが文学分野で分かちがたい関係を持っていると理解すると、先に触れたフィリピンの批評家とフィリピン系アメリカ人の批評家の間に対立が生じていることは分かりにくい。ゴンザレスの評価に見られるように、両者の間になぜこのような問題が起きているのだろうか。

Ⅲ．フィリピン系アメリカ文学をめぐる論争とポストコロニアル思考

フィリピンとフィリピン系アメリカ文学の批評界を分断するような論争が進行中だが、何が問題でなぜ起きたのかをここで考えてみたい。それによって、フィリピン系アメリカ文学の抱える問題、ひいてはアジア系アメリカ文学の抱える問題が明らかになろう。

そもそもフィリピンのフィリピン研究者とアメリカのフィリピン系やフィリピン研究者の間の齟齬は、上述した2000年前後ごろに表面化したと考えられる。当時フィリピンにおける米軍基地撤廃（1992年）やフィリピン革命100周年（1998年）などを期に、政治も社会もアメリカからの離脱／自立を目指す方向に動き始めた。主に歴史分野からはじまったフィリピン独自の研究志向は、アメリカのフィリピン研究者との間に論争を起こし、いわば旧宗主国と旧植民国間の非対称的関係を解消とする動きとそれをけん制しようとする勢力の縮図だとも見られる（San Juan, 2000）。文学研究はすでにこの流れの中にあって、フィリピン文学とフィリピン系アメリカ文学をめぐって批評界に論議が起きたが、その中でももっとも激しい論争は、ジェシカ・ヘゲドンをめぐるものである。ヘゲドンはいまやアジア系アメリカ文学を代表する現代作家の一人であり、アメリカ文学の中でも重視されている。その代表作『ドッグイーターズ（犬を食う人）』*Dogeaters*（Hagedorn, 1990）は全米図書賞候補作として話題となり、作家としての地位を確立したものである。タイトル自体がすでに述べたようにフィリピン人に対する否定的ステレオタイプを用いた挑戦的なものであるが、手法も内容も斬新で先駆的だと評価されてきた。これに対して、主にフィリピン人男性批評家から激しい批判がされており、アメリカ側の主にアジア系の女性批評家がヘゲドン

を擁護するという図式となっている。これは批評面からも内容面からもジェンダーで分断された、いわばジェンダー論争ともいえる。その内容を追うには、まずはヘゲドンの作品の特徴を挙げる必要があろう。

Dogeaters はポストコロニアルのフィリピンをポストモダンの手法で表現した物語である。10歳の少女リオ・ゴンザーガを中心に14、５人の人物が主要登場人物として出てきて、物語は混乱を極めるが、次第に一つの筋書きに収束していく。無関係だと思われていた人物は、すべて終盤の上院議員暗殺事件に関連していることが明らかになる。ことに傍観者のリオ、黒人米兵とフィリピン人娼婦の混血児ジョーイ、暗殺される上院議員の美人の娘デイジーが最も丁寧に描かれているが、マルコス独裁政権下のアキノ上院議員暗殺事件を下敷きとした政治色の強い一面も持つ。しかし、全43章で場と時間はめまぐるしく入れ替わり、その間に新聞記事や演説草稿、詩や歌詞、タガログ語などがちりばめられるというポストモダンの手法は、雑多で落ち着きのない不安定な社会を映し出し、単一メッセージを伝えようというものではない。またアメリカは舞台とはならないが、随所にアメリカ大衆文化のフィリピン文化への浸透が示されていること、さらに最終的にリオが絶望してフィリピンを脱出し、アメリカで自らを振り返るという設定は、アメリカとの抜き差しならない強い結びつきを示唆する。また、ジョーイとデイジーという、人種、階級、セクシュアリティどれをとってもまったく交点を持たないはず二人が、最終的に社会からはじき出されて山中ゲリラとして手を結ぶというストーリーも政治的な解釈が可能である。

このような作品および作者に対して、批判をするのが E. San Juan Jr、Leonard Casper、Oscar V. Campomanes などの在フィリピンの男性批評家である。完全に一致しているわけではないが、彼らの批判の主力は①ポストコロニアル、②ポストモダン、③ジェンダー、④ナショナリズムとフェミニズム、⑤歴史の扱い方、⑥作家としての立場の６点であり、以下のようにまとめられる。

① この作品ではフィリピンのポストコロニアル反体制文化は適切に表明されておらず、植民化されたフィリピン社会をいわばただ解剖したにすぎない。

② 語りとしてのポストモダン手法は差別を撤廃する力となり得ず、複数視点による語りの非連続性は効果をもたずむしろ欠陥を示すものである。この一見魅力的なハイブリッドの語りは図式的でしかなく、繰り返しも効果をもたらさない。また英語という植民者の言語そのものの限界も示している。

③ テクストはジェンダー化されたサブテキストに組み込まれ（ジョーイが男娼となることやデイジーが美人コンテストに優勝すること）、ジェンダーとセクシュアリティの融合を引き起こす（ジョーイは同性愛者に、デイジーは大勢の軍人にともに強姦される）という結果に終わっている。しかもジェンダー問題は最終的にナショナリズムの物語へ移行して問題意識は希薄だ。

④ デイジーは、美人コンテスト優勝の後にフェミニズムに目覚めて自己主張するようになるが、父親の暗殺と自らの陵辱事件を経て反政府ゲリラの中に身を投じ、主要メンバーとなる。ここにおいてナショナリズムとフェミニズムという本来相反する観念がデイジーの中に統合されるのは、まったく矛盾していて不自然だ。

⑤ 歴史を取り上げるならば、フィリピンの文化史がフィリピン系アメリカ文学の枠組みとなっている現状から、フィリピンのアメリカ化ではなくアメリカのフィリピン化、つまりホームランドとどのように向き合うかを問題にすべきだし、現状はその方向にある。

⑥ 結局、問題はこの作品を誰に向けて書いたか、ということになる。ヘゲドンは明らかにアメ

リカに向けて書いているのであって、フィリピンのためではない。これ自体問題であるが、長期間フィリピンを離れている彼女が不正確な知識でフィリピンについて書くこと、フィリピン人の従属的精神形成の過程を理解せずにアメリカにおいてフィリピン人のエスニック主体として発言することの欺瞞性も問題視すべきである。ここに描かれているのはリアリズムが決定的に欠如した想像上のマニラでしかなく、彼女はアメリカ主流文学への受容を狙ったオリエンタリストであり、アメリカ主流への迎合主義者ともいえよう。

以上の強烈な批判に対して、ヘゲドンとその作品を擁護する論も当然出ている。論者はジェンダーとエスニシティに関するアジア系アメリカ文学研究者である Rachel Lee や Lisa Lowe らで、いずれもアメリカ生まれのアジア系（中国系）女性である。彼らはヘゲドンのテーマと手法を高く評価し、次のようにそれぞれに対する反論を加えている。

① ナショナリストのゲリラを登場させてポストコロニアル社会の反体制化を示し、強力なネオコロニアリズム批判を展開している。

② 複数視点（ブリコラージュ、パスティーシュ）、断片化などのポストモダン技法は、あらゆる支配言説への不信、転覆を表明する手段であり、脱植民地技法とでも呼ぶべき斬新で強力な手法である。安易なハイブリディティは避けるべきだが、社会を記録的にではなく複層的に描く手法はここで有効に働いている。公的歴史を断片化し、大衆の視点を取り入れて公私の境界を突き崩し不完全な記憶に置き換えることで、移民のアジア系アメリカ人の立場からマルコス時代を描くことに成功している。

③ これはフィリピン女性視点からマルコス独裁時代を描いたものであり、多様な女性性の錯綜を効果的に駆使したものだ。政治をジェンダー化することで、トランスナショナル視点になっている。

④ リオがアメリカに、ジョーイがナショナリストに解放の道筋を見出すように、デイジーはフェミニズムとナショナリズムの交点に解放を求めたといえる。ナショナリズムとフェミニズムは相反するものではなく、アジア系女性のポストコロニアルな選択をしめすものと理解すべきだ。最終章にはセクシュアリティと国家が併置して論じられており、デイジーが選び取るゲリラという立場こそは、政治に翻弄される女性のセクシュアリティを拒否しナショナリズムを選択する主体的な立場に他ならない。

⑤ この作品に関してフィリピンのエスニシティにとって本物云々という論議はまったく意味がない。フィリピンにおけるアメリカ支配とその影響を強調したものであり、アメリカのもたらした矛盾を描くことに成功している。

⑥ 作家の関心は、マルコス時代を描きながらアメリカ大衆文化とマニラ社会の遭遇およびフィリピンとアメリカの境界線の不明瞭さをあぶりだすことである。ゆえにリアルであって想像的なアメリカのアイデンティティが問われているのであり、誰かに向けたプロパガンダなどではない。

この批判と反論は両者の真っ向からの対立を示しており、これまで論じてきたポストコロニアル・フィリピンの混乱を象徴するものでもある。フィリピンの歴史、およびフィリピン人の比米の往来を考えれば、フィリピン人批評家が主張しているナショナリスティックな主張も理解できよう。彼らの命題は、どのようにフィリピンを再建するか、国家の誇りを取り戻すかであり、それはこの批判の中に明瞭に読み取れる。たとえアメリカで出版されるフィリピン系の文学にしてもこれを基調とすべきであり、その趣旨に反する部分は見逃せないというわけだ。彼らは誤解を

生みかねない、あるいは誤ったフィリピン表象を植民地主義的な眼差しを持つとして告発する。これに対してアメリカ側の批評家が主張するのは、アメリカ文学として、あるいは現代文学としての評価がまず重要であり、その観点からフィリピン問題の扱い方には幅が出てきて独自性のある形態を取ることになり、その意義はあるとする。同一の作品がこのようにまったく異なる評価をされる背景には、ポストコロニアルの位置づけの相違があるわけだ。それはアジア系アメリカ文学の根本的な問題点にも通じる。つまりアジア系アメリカ文学において歴史はどうあるべきか、移民は故国をどのように表象できるか、イデオロギーはどのように文学で表すべきか、そして究極的には、アジア系アメリカ文学はだれに向けて書かれたものか、といった重い問題である。

おわりに

フィリピン人の歴史、社会、文学をアメリカへの移民という項目から考察してきて浮上するのは、植民時代の重みである。*Dogeaters* というフィリピン系アメリカ小説は、アメリカ文学の読者にとってはきわめて魅力的なものである。この作品は、フィリピンの植民地体験が、社会、経済、文化、言語などの剥奪を今に至るまで広範に影響を及ぼしていることを巧みにしかし深刻に表現し、しかもグローバル時代におけるフィリピンのしたたかな現在も示す。さらにフィリピン人のアメリカ化というストーリーから植民化された自己という問題をあぶりだし、アメリカ化している眼差しを持つ読者である日本人などが問題を共有することをも喚起する。だが、この作品が引き起こしているフィリピン在住批評家とフィリピン系アメリカ人作家間の相克と見られる論争は、ポストコロニアル問題が今なお未解決だということを示している。この論争はエスニック文学のあり方そのものを問うものであり、日本人のわれわれ研究者にも、アメリカ文学との関わりのあり方を考えさせる。文学は社会や文化なくして存在しえないが、価値をどこに置くべきなのか。エスニック文学は、そのエスニックの原点となる社会や文化を映し出したものであり、そこを除外して真価を問えない。だが、本質主義に陥らないでなお、いかにその文学を理解すべきだろうか。アジア系アメリカ文学研究の原点は、あくまでも歴史、社会、文化といった幅広い枠組みの中で文学を考えるということであり、フィリピン系文学読解にはより深く幅広い知識と認識や思考が必要だと理解できよう。

［付記］　本稿は平成19年度岐阜聖徳学園大学研究助成金による研究の成果である。

参考文献

Aguilar−San Juan, Karin.,ed. *The State of Asian America: Activism and Resistance in the 1990 s*. Boston: South End, 1994.

Asian American Studies Center,ed. *Amerasia Journal Vol.24, No.3, Centennial Commemorative Issue: Essays into American Empire in the Philippines.* Los Angeles: UCLA, 1998.

Bulosan, Carlos. *America Is in the Heart*. Seattle: University of Washington Press, 1943/1973.

Cheung, King-kok, ed. *An Interethnic Companion to Asian American Literature.* Cambridge: Cambridge University P. , 1997.

_____, ed. *Words Matter: Conversations with Asian American Writers.* Honolulu: University of Hawaii P., 2000.

Chin, Frank, et al., eds. *Aiiieeeee!: An Introduction of Asian American Writers.* Washington D.C.: Howard UP., 1974

De la Cruz, Enrique B., et at., *Confrontations, Crossings, and Convergence: Photographs of the Philippines and the United States, 1898−1998*. Los Angeles: UCLA Asian American Studies Center, 1998.

Espiritu, Augustu. "The 'Pre-History' of an 'Asian American' Writer: N. V. M. Gonzalez' Allegory of Decolonization." *Amerasia Journal* 24: 3 (1998):126−141.

Espiritu, Yen Le. *Asian American Panethnicity: Bridging Institutions and Identities*. Philadelphia: Temple UP, 1992.

Espiritu, Yen Le. *Filipino American Lives*. Philadelphia: Temple University Press, 1995.

_____, *Home Bound: Filipino American Lives across Cultures, Communities, and Countries*. Berkeley: University of California P., 2003.

Gonzalez, N.V.M. "The Maker of Dreams in Filipino Life and Letters." *Amerasia Journal* 24(3).

Hagedorn, Jessica. *Dogeaters*. New York: Pantheon, 1990.

_____, *Dream Jungle*. New York: Viking, 2003.

_____, "An Interview by Emily Porcincula Lawsin" *Words Matter: Conversations with Asian American Writers*. 21-39.

_____, "Jessica Hagedorn" *Contemporary Asian-American Plays*. Ed. Misha Berson, New York: Theatre Comm

_____, "The Exile Within/The Question of Identity." *The State of Asian America: Activism and Resistance in the 1990s*.

_____, ed. *Charlie Chan Is Dead: An Anthology of Contemporary Asian American Fiction*. New York: Penguin, 1993.

_____, ed. *Charlie Chan Is Dead II: At Home in the World : An Anthology of Contemporary Asian American Fiction*. New York: Penguin, 2004.

Kim, Elaine. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple UP., 1982.（『アジア系アメリカ文学―作品とその社会的枠組み』植木照代、山本秀行、甲幸月訳、世界思想社、2002年）

Koerner, Mae Respicio. *Images of America: Filipinos in Los Angeles*. Charleston: Arcadia Publishing, 2007.

Leong, Russell C. "Returns & Representations: Recasting Viet Nam, the Philippines, India, Hong Kong, Asian America." *Amerasia Journal* 23：2（1997）

Lowe, Lisa. *Immigrant Acts*. Durham and London: Duke University P., 1996.

_____, "Memories of Colonial Modernity: Dogeaters" *Amerasia Journal* , 24：3（1998）：161-167.

Palumbo-liu, David, ed. *The Ethnic Canon: Histories, Institutions and Interventions*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1995.

Root, Maria P. P., ed. *Filipino Americans: Transformation and Identity*. Thousand Oaks: Sage Publications, 1997.

San Juan, Jr., E. *From Exile to Diaspora: Versions of the Filipino Experience in the United States*. Colorado: Westview Press, 1998.

_____, *The Philippine Temptation: Dialectics of Philippines-U.S. Literary Relations*. Philadelphia: Temple UP., 1996.

_____, "The Predicament of Filipinos in the United States." Aguilar-San Juan, Karin, ed., *The State of Asian America: Activism and Resistance in the 1990 s*.

Sumida, Stephen. "Filipino American Literature: N.V.M. Gonzalez, and Oscar V. Canpomanes." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*. King-Kok Cheung, ed.

レイナルド・イレートほか『フィリピン歴史研究と植民地言説』（永野善子編・監訳）めこん、2004.

エヴィオータ、エリザベス・ウイ『ジェンダーの政治経済学』明石書店、2000.

萩野芳夫『フィリピンの社会・歴史・政治制度』明石書店、2002.

河原崎やす子「Jessica Hagedorn の Dogeaters を読む―「食べる」ことと「飢える」ことの意味」*AALA Journal* 1（1994）：68-74.

_____, アジア系アメリカ文学研究会編「変容するアジア系アメリカ人意識―ジェシカ・ヘゲドンを解読する」『アジア系アメリカ文学―記憶と創造』大阪教育図書、2001.

_____, 「フェスティバルとジャングルと―フィリピン系作家に見るポストコロニアル・ディアスポラ意識」『越境・周縁・ディアスポラ―三つのアメリカ文学』南雲堂フェニックス、2005.